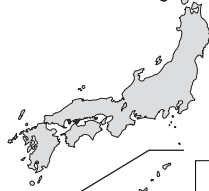


国土学事始め



大石久和

国土技術研究センター理事長

の雰囲気が残っていました。印象的だったのは、われわれのワーゲンとすれ違うトラバントでした。車体の一部に紙の集合材を使ったと言われ、混合油を用いるツーサイクルエンジンのスピードも出ない小さな車に、大きなドイツ人が体をすくめるようにして乗っていました。

実は、そのドライブでもっとも驚いたのは、ひび割れだらけのアウトバーンでした。西ドイツの完全な路面に比べて、ヒトラー時代そのままのコンクリート舗装が網目のようにひび割れを起こし、その隙間をアスファルトで充填していたのです。これでは高速で走れるわけがありません。

旧東ドイツから学ぶ

旧時代にはこの車でも10年待ちと言われていましたから、乗っていたドイツ人は共産党の幹部だったのだろうと思いつつ眺めたものです。

社会主義体制は、インフラを見事に無視していたのだと分かりました。

高速で走れないことからくる不利益はみんな多少ずつ共有しますから、どれだけの損失を被っているのか、なかなか分かりません。だから放置するというのが社会主義の東で起こり、それに対し資本主義の西では路面は完璧に管理され、ネットワークも年々充実していったのとの違いは、実に奇妙な印象でした。

ベルリンの壁崩壊からわずか2年後の1991年にベルリンでの会議に出席した際、休日を利用してレンタカーでドレスデンに出かけてみました。友人は留学時代に左ハンドルの経験があり、彼が運転、私がナビというわけです。

あの優秀なドイツ人でも制度を間違とうとこんなことになるのかと、窮屈な姿勢を気遣いに思い、感慨深いものがありました。

われわれも旧東ドイツのようにインフラ欠如の不利益を皆で耐えるのではなく、それを改善して生活をよくしていく積極的な姿勢を持ちたいものだと思つづく思います。

壁崩壊の直後ですから、あちこちにまだまだ旧東ドイツ

の東で起こり、それに対し資本

主義の西では路面は完璧に管

理され、ネットワークも年々